

保育期間が乳幼児の発達に及ぼす影響と保育の質

— 「5歳児の育ちをとらえる指標」による調査データを通して—

諏訪きぬ

はじめに

エンゼルプラン（1995-1999）、続く新エンゼルプラン（2000～2004）は共に「低年齢児保育の拡大」を重要な施策の柱に位置づけている。新エンゼルプランの低年齢児受け入れ枠の最終目標値は68万人で、99年度実績より5年間で11万6千人増加させる計画である。この目標が達成されれば、10年間にわたるプランの実施によって、23万人もの低年齢児が新しく保育所保育を受けるという低年齢児保育急増計画である。

急激な低年齢児保育の量的拡大が、保育の質を低下させるのではないかとの懸念を生むのは当然である。しかも規制緩和・民営化路線の下で進められる施策であるだけに、懸念は危惧へと変容している。低年齢児保育が男女共同参画社会の実現にとって必要不可欠であり、少子化対策としても重要な施策であるとするれば、その質の確保に対しても十分な施策が講じられなければならないであろう¹⁾。

生後間もない時期から6年、5年、4年…と長期間にわたって保育所保育を受けて育つ子どもたちにとって重要なことは、その保育が子ども一人ひとりの豊かな発達を保障するものでなければならないということである。しかしながら日々長時間にわたる保育を、特定の保育者が一人ひとりの子どもに責任を負って実施することは不可能である。特定の保育者と子どもの継続的な関係を重要視する園であっても、その関係性は一日の中のある部分でしか成立せず、特定の保育者が不在の時間帯には他の保育者の介在は不可欠である。

従来から指摘されてきた長時間・長期間保育の弊害は、「3歳児神話」に依拠して主張されてきた面もあるが、こうした不備な保育体制から発せられた面も否定できない。エンゼルプラン、新エンゼルプランは、低年齢児保育拡大と共に保育時間の延長にも熱心であったが、短時間保育者の導入によってそれらを実施する体制を打ち出しており、長時間・長期間保育の質を向上させるための施策は見当たらない。

こうした状況の中で問われるべきことは、幾多の制約を抱えながらも、今日の保育園において子どもたちにとって安心感のある保育をどの程度提供ができるかであろう。家庭と仕事の両立支援策として、保育の質を問わないまま低年齢児保育や延長保育が拡大されることは、幼な児にとっても日本の将来にとっても、不幸なことといわなければならない。

1. 研究の経過

われわれがここ10年にわたって取り組んできた研究の経過は以下のようなものである。

1) 6年間にわたる縦断的保育観察

1994年4月から6年間、産休明け乳児保育に熱心に取り組んできた静岡・I園、A園で保育観察を行い、乳児から保育を受けた子どもたちの6年間にわたる育ちの姿を追求した。両園共に、子どもと保育者との特定の関係を育むために担当制を試みたり、クラス担任もち上がり制を行ったり、子どもが自発的に活動できるように保育室環境を整えるなど、不断に保育の質の問い直しを行ってきた。「保育の質」が高ければ、従来から指摘されてきた長時間長期間保育の弊害は無いのではないかとの研究仮説の下に始めた観察研究であったが、われわれもまた、「長期間保育児と短期間保育児の発達上の差異」というテーマに直面することになった。なぜなら卒園を前にした5歳児クラスの中で、落ち着きのない姿を呈していたのが、長期間にわたって保育を受けていた子どもたちだったからである。

2) 長期間保育児と短期間保育児との発達上の差異への着目

「長期間保育児と短期間保育児との発達上の差異」を明らかにすることを目的に、「5歳児の育ちをとらえる指標」（5指標15項目）を作成した（表1）。それをを用いて5歳児クラス担任を中心に卒園児全員の発達評価を行い、その評価を得点化して、長期間保育児（0-2歳で入園）と短期間保育児（3歳以降に入園）の得点のあり方について検討した。その結果、第1回目の調査（2000・3）では、3歳以降に入園した短期児の方が平均評価得点の高い項目が多いという結果が出た（日本保育学会第54回大会報告及び「5歳児の発達と保育の質」保育の研究NO.18, 保育研究所2001所収）。第2回目の調査（2001・3）では、短期児よりも長期児の方が平均評価得点の高い項目が多いという、全く反対の結果が得られた（日本保育学会第55回大会報告及び「5歳児の発達と保育の質」（2）保育の研究NO.19, 保育研究所2002所収）。第3回目の調査（2002・3）では、第2回目と同じ傾向が出たが、長期児と短期児の平均評価得点の差がより拡大する結果となった。

I園とは今なお共同研究を継続しており、卒園直前に毎年発達評価を行っている。I園という特定の園だけの調査データではあるが、今後もそのデータを蓄積することによって、「長期間保育児と短期間保育児との発達上の差異」について、一定の結論が得られるのではないかと考えている。

3) 個々の子どもの発達評価得点への着目

個々の子どもの発達評価を積み重ねる中で保育者の中から出されてきたのが、5指標15項目の得点の出方に着目する必要があるのではないかという問題提起であった。この指摘はI園のみならず、I園と同様に保育観察を行い、5歳児の発達評価に取り組んでくれたA園の保育者たちからも出された。以前から問題としてきた「低得点群」の子どもたちだけでなく、「自己信頼」指標の得点が低く出ている子、「かかわり力」指標の得点が低く出ている子など、「気になる子」がいるというのである。

2003年5月の日本保育学会第56回大会では、その提案に沿って、個々の子どもの発達評価得点（15項目）について分析を行い、何が「気になる」出方なのか、その型分けを試みた。

2. 研究の目的

本論文の目的は、日本保育学会第56回大会での研究報告を基にしつつ、発達評価4回分55名のI園卒園児の評価得点を分析し、型分けの妥当性を再検討することである。その上にとって、型分けの意義（型分けと保育者たちが気にする「気になる子」への保育実践との関連）についても考えてみたい。

実際に子ども一人ひとりと深く交わり、保育を行っている保育者たちが、長期児と短期児の平均評価得点の高低よりも、子ども一人ひとりの評価得点の出方に意味を見い出そうとするのは当然であろう。またそのような発達評価得点を基にした「気になる子」の型分けが、保育実践を進める上で、役立てられ実践上の意義を有するとなれば、長い共同研究の甲斐があったというものであろう。

表1 長期児短期児の内訳

人

回数	調査年月	卒園児数	長期児	短期児
1	2000・3	14	11	3
2	2001・3	15	10	5
3	2002・3	11	6	5
4	2003・3	15	10	5
計		55	37	18

3. 研究の方法

日本保育学会第56回大会研究報告では、発達評価3回分のデータに基づいて6つの型分けがあったとしたが、ここでは発達評価4回分55名の評価得点を基にして、6つの型分けの修正を試みる。保育者は「高得点群の中にも気になる子がいる」と指摘している（例えば、第56回大会研究報告のタイプ6：5指標全ての得点が高いが気になる子）。しかし今回は「気になる子」を平均発達評価得点63点以下の子どもに限定して抽出することとし、高得点だが気になる子はとりあえず省くことにした。平均発達評価得点63点以下の子どもに限定した場合にも、「気になる」と思われる子は20名（36%）もの高い割合を占めている。それらの評価得点の配列に注目して型分けを試みることにした。

4. 研究の結果と分析

1) 「気になる子」の発達の類型化

表2に上げた15項目の得点（よい5点・ふつう3点・よくない1点）のあり方を卒園児別に検討し、型分けを行った（表3）。前回40名の中の「気になる子」は16人（40%）、今回55名の中の「気になる子」は20人（36%）である。

表2 5歳児の育ちをとらえる指標

指標	15項目
自己信頼	1 情緒的に落ち着いている
	2 むつかしいことに取り組む
	3 失敗を他人のせいにならない
生活力	1 身の回りのことを自力でする
	2 園生活の流れ・見通しある行動
	3 すべきことや役割を意識して行動
あそび力	1 あそびの技能の習得
	2 あそびに集中して取り組む
	3 役割を分担・あそびの工夫・展開
表現力	1 身振り・表情豊かに思いを表現する
	2 自分の思いを的確に表現する
	3 経験や思いをすじ道を立てて伝える
かかわる力	1 願いや要求を相手に伝える
	2 相手の立場に立って考え行動する
	3 意見の対立やトラブルを解決する

(よい 5点 ふつう 3点 よくない 1点)

われわれは、「5歳児の育ちをとらえる指標」作成に当たって、「自己信頼」の系から「かかわり」の系に向けて発達するとの見通しをおいた。すなわち愛着形成を基盤に形成される「自己信頼」(乳児前期)→社会的規範の獲得を通して培われる「生活力」(幼児前期)→行動力、表象能力と共に育つ「あそび力」(3歳)→言語能力、自意識・他者意識の形成と共に培われる「表現力」(4歳)→自立性と協調性との調和を通して形成される「かかわりの力」(5歳)というように、乳幼児期の発達過程を内包する形で指標を作成した。

「5歳児の育ちをとらえる指標」(5指標15項目)の総評価得点および各項目の得点によって、保育者の「気になる子」を類型化した結果、前回は、6タイプに型分けした。「自己信頼」をはじめ「生活力」「あそび力」得点は高いのに「表現力」「かかわりの力」項目に低い得点がみられる子を「タイプ1」とした。ここには5名の子が該当した。「タイプ2」は「タイプ1」とは逆に「自己信頼」は低いのに他項目は高い子で、3名が該当した。「タイプ3」は「生活力」「あそび力」「表現力」項目は得点が高いのに、「自己信頼」「かかわりの力」項目が低い子で、4名であった。「タイプ4」は「自己信頼」得点は高いが他の項目にばらつきのある子で、1名の子どもが該当した。「タイプ5」は5指標全てにわたって得点の低い子ども(低得点群とも呼んでいる)で、2名の子が抽出された。「タイプ6」は、15項目の得点はまあまあ高いが気になる子として1名の子が取り出された。

今回は、4回分の総評価得点平均63点以下の子どもを対象に、再度、類型化を試みた。その結果タイプ1に7人、タイプ2に0人、タイプ3に6人、タイプ4に0人、タイプ5に7人、タイプ6に0人、計20人(36%)の子どもが取り出された。今回は類型の名称を新しくタイプA、B、Cとし、タイプ1を「タイプA」に、タイプ3を「タイプB」に、

表3 気になる子の発達の類型化

前回の類型	内 容	前回	今回	今回の類型
		人	人	
タイプ1 (高→低)	「自己信頼」「生活力」「あそび力」等の得点は高いが、「表現力」「かかわり」得点が低い子	5	7	タイプA (高→低)
タイプ2 (低→高)	「自己信頼」得点は低い、「生活力」「あそび力」「表現力」「かかわり」等の得点は高い子	3	0	
タイプ3 (低→高→低)	「生活力」「あそび力」「表現力」得点は高いが、「自己信頼」「かかわり」得点が低い子	4	6	タイプB (低→高→低)
タイプ4 (高→バラツキ)	「自己信頼」指標は高いが、「生活力」「あそび力」「表現力」「かかわり力」得点にばらつきのある子	1		
タイプ5 (低→低)	5指標共に得点の低い子	2	7	タイプC (低→低)
タイプ6 (高→高)	5指標共に得点が高いが気になる子	1		
計		16	20	

タイプ5を **タイプC** と命名することにした。タイプAには7人（長期児3人，短期児4人），タイプBには6人（長期児1人，短期児5人），タイプCには7人（長期児5人，短期児2人）が該当した。それら3類型に該当する子どもは、ほぼ1/3ずつに別れており、それぞれの評価得点を示すと表4～6，図1～3のようになる。

2) タイプ別「気になる子」の発達の特性

① タイプA（高→低）の場合

タイプAは親子関係を基盤に愛着形成はされており，基本的信頼感も有るが，自己を表現したり積極的に他児とかかわる力が十分に育っていないところが「気になる」子どもたちである。保育に当たったI園の保育者たちは「自己信頼は高いが，表現力・かかわる力が低い」タイプとしており，具体的事例としてF子を上げている²⁾。I園の保育は「子どもの受容」を基本としており，F子の指導に当たっても，追従的な態度を気にはしながらもそれを取り立てて注意することはしない。他児に好かれ受け入れられているF子を支えながら，得意なあそびで目立たせる位置におくことによって，自信をもたせ発言力を増すように仕向けることに意を払って，保育を展開している。Aタイプの場合，

長期児 3 人，短期児 4 人となっており，特に保育期間による影響はないと考えてよいと思われる。

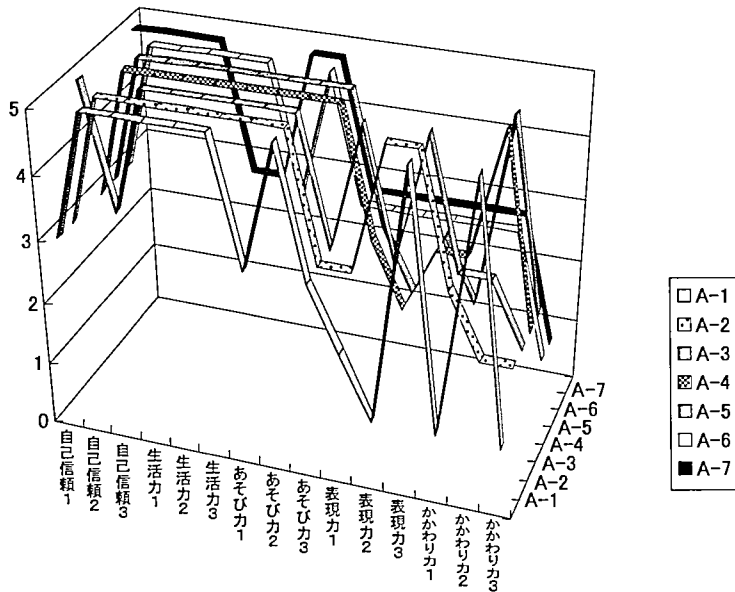
事例F子の場合 すべてにおいてマイペース。目立たぬ存在で，誰かが始める遊びについていく。自分の要求や願いを表す力の弱さが目立つ。また両親は，親が良しとする程度に“出来ること”を本児に求めることが多い。それを本児に伝えたり共に考えたりするのでなく，本児の行動にじれったさを感じ，イライラとした態度で接する傾向がある。しかし本児は，仲間とのかかわりの中では面倒見が良く，しっかりと相手の思いを受けとめるため，多くの子から好かれている。積極的に自己表現してかかわらずとも，その穏やかさが仲間にはほっとする存在として認められている。保育者が仲介者となり，

表 4 タイプ A (高一低) の子どもの評価得点

	自己信頼			生活力			あそび力			表現力			かかわり力			計	事 例
	1)	2)	3)	1)	2)	3)	1)	2)	3)	1)	2)	3)	1)	2)	3)		
A-1	3	5	5	5	5	5	3	5	3	2	1	5	1	5	1	54	F子の場合
A-2	3	5	5	5	5	5	5	5	3	3	5	5	3	2	2	61	
A-3	5	3	5	5	5	5	5	5	3	5	3	5	3	3	2	62	
A-4	3	5	5	5	5	5	5	5	5	3	2	3	3	5	2	61	
A-5	3	5	5	5	5	5	5	5	5	3	2	3	2	5	2	60	
A-6	3	5	5	5	5	5	3	5	3	3	3	3	3	3	1	55	
A-7	5	5	5	5	3	3	5	5	3	3	3	3	3	3	1	55	

(注：□長期児を示す)

図 1 タイプ A の子どもの評価得点



本児が自信を持つ遊び（細かな手芸など）を認めることで、その遊びが仲間へと広がり、本児の成長が見られた。

② タイプB（低→高→低）の場合

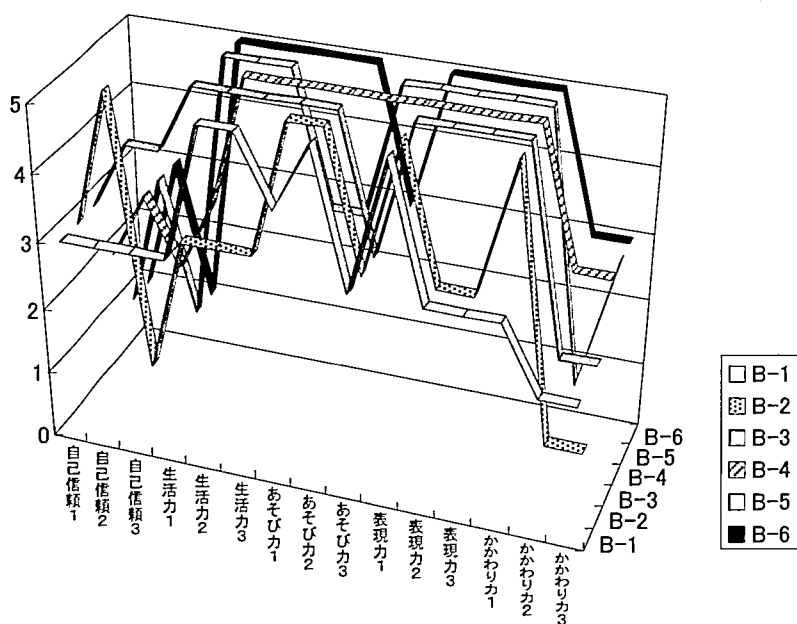
I園の保育者たちが「生活・あそび・表現力は高い」が「自己信頼・かかわる力は低い」として「気にしている」子どもたちが、タイプB（低→高→低）である。ここに取り出された6事例をみると、幼少期から多少親子の関係に問題があり、それがかかわる力の形成にマイナスに働いているように思われる。事例としてI園の保育者が上げているO君は保育園に見られる短期児のある典型を示しており、家庭の崩壊と共に就

表5 タイプB（低→高→低）の子どもの評価得点

	自己信頼			生活力			あそび力			表現力			かかわり力			計	事 例
	1)	2)	3)	1)	2)	3)	1)	2)	3)	1)	2)	3)	1)	2)	3)		
B-1	3	3	3	3	5	5	4	5	3	5	3	3	3	2	2	52	
B-2	3	5	1	3	3	3	5	5	3	5	3	3	5	1	1	49	
B-3	3	4	4	5	5	5	5	5	3	5	5	5	5	2	2	63	O君の場合
B-4	2	3	2	3	5	5	5	5	5	5	5	5	5	3	3	61	
B-5	1	3	1	5	5	5	3	3	5	5	5	5	5	1	5	55	
B-6	1	3	1	5	5	5	5	5	3	5	5	5	5	3	3	59	

(注：□長期児を示す)

図2 タイプBの子どもの評価得点



学を6ヶ月後に控えた時期に保育園に移らざるを得なくなった子どもである。だから前の幼稚園を懐かしんで、I保育園にはなかなかとけ込めない。心理的に不安定な母親とO児を共に支えることを保育の課題としながらも、十分な方策がとれぬまま卒園を迎えてしまったことをI園の保育者は「心残りだった」と語っていた。ここには短期児が5事例と多く、O君のような家庭的要因が子どもの発達に影響を与える事例群として着目してよいように思われる。

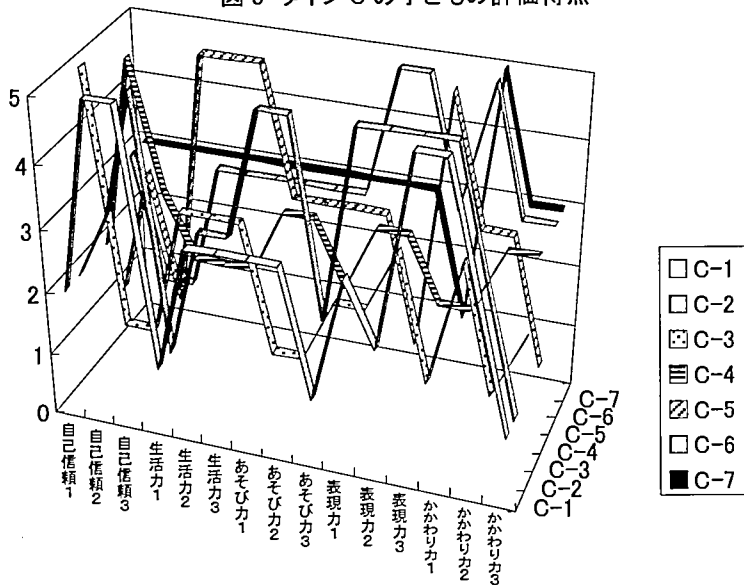
事例Oの場合 両親の離婚、転居、転園。本園在園は6ヶ月とまさにこの子の周りを取り巻く環境の急激な変化が要因となりこの得点に表れている。転園以前の友だちが懐かしく帰りたい思いも強いのか、なかなか園になじめなかった。他児からの誘いかけもあったが、「前のところはそうじゃなかった」等の受け答えになり、なかなか関係がとれない。思いきりマイペースだが人との関わりがとても自然に出来るiちゃんとのままごと遊びなどから、少しずつ本児にもホッとした表情が見られるようになっていった。

表6 タイプC (低→低) の子どもの評価得点

	自己信頼			生活力			あそび力			表現力			かかわり力			計
	1)	2)	3)	1)	2)	3)	1)	2)	3)	1)	2)	3)	1)	2)	3)	
C-1	2	5	5	1	3	3	3	3	1	3	2	5	5	3	1	45
C-2	2	3	5	1	3	3	5	5	2	5	5	5	5	3	1	53
C-3	5	1	1	3	3	3	1	1	2	2	3	1	3	1	2	32
C-4	2	5	3	2	2	2	3	3	2	3	3	2	2	3	3	40
C-5	1	3	1	5	5	5	3	3	3	3	1	5	3	3	1	45
C-6	3	1	1	3	3	3	3	3	3	5	5	3	5	3	3	47
C-7	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	1	5	3	3	45

(注: 長期児を示す)

図3 タイプCの子どもの評価得点



③ タイプC（低→低）の場合

表6からも明らかなように、タイプCに属する子どもたちは、保育者たちの「気になる」というレベルを超えて、問題を抱えた子どもたちである。タイプBが本人よりもどちらかと言えば家庭的要因に問題がある事例群とすれば、タイプCは家庭にも子ども自身にも問題がある場合が多い。ここでは紙数の関係上、事例は載せないが、かつてA園の保育者たちが低得点群として5事例の分析を行っている³⁾。その中では母親が精神的に病んでいる、放任しがち、離婚で不安定という親側の事情と共に、子ども自身にアレルギーがある、ぜん息がある、馴染みにくい子など子ども自身のもつ問題性が指摘されている。

ここでは7事例中5事例が長期児であり、保育園においては長期児の中に一定数このような複雑な問題を抱え、十分発達できない子どもたちがいることに注意を払う必要があることを示唆している。

おわりに

保育者の「気になる子」を手がかりに、気になる子を3タイプに絞り込んでみた。そのことによって気になる状況を生み出す発達要因について、把握しやすくなったように思われる。これを手がかりに、保育の場で保育者が親とどう向き合う必要があるか、子どもをどう受け止めていくべきかという実践上の指針を生み出すことができるように思われる。

実際には保育者の「気になる子」はこの他にも存在している。「得点は高いが気になる子」というのも少子化時代には見落としてはならないであろう。また「入園当時から抱っこすると違和感があるのか、保育者に安心して抱かれることがなかった。母親は本児に対して常に高レベルなことを要求し、本児からの要求に対してはあまり気持ちが伴わず仕方なくやってあげるという態度と言葉が周囲の人にもわかるほど強く見られた」というI園の事例分析からは、今日ある親子関係の姿が浮き彫りにされており、少子化と共にこのような事例（タイプ2，6）は増大していくように思われてならない。

網野武博氏等による「保育効果に関する縦断的研究（1）⁴⁾」は、保育所入所の始期、期間、保育の質、家庭との連携等々が乳幼児期及び児童期、青年期、成人期に及ぼす影響について文献検索（1980-2001）をした結果を、国外研究94点、国内研究39点を収録している。それらによっても保育の効果を保育期間の長・短で単純に言い切れないであろうことを読みとることができる。大量のデータを追うマクロ的な研究とは異なって、われわれの研究は特定の園に限定したミクロ的な縦断的研究であるが、そのことによって見えてくるものもたくさんある。一定の保育の質を保持しているかに見える同一園においても、スタッフの事情によって保育の体制は時を定めず変化していること、また子どもの家庭の事情も両親の関係の変化や失業、転職等絶えず変容していること、子ども間関係の形成も実に変動的であること等々、保育の効果に影響を与える変動的要因が多々あることが分かる。

したがって単純に長期・短期の保育効果を検討するという視点から、次第に個々の子どもの状況をつぶさに検討すべきではないかと考えるようになった。本論文では、I保育園における4年分の卒園児55名の発達評価得点を基に、15項目の得点のあり方を分析し、子

子どもの発達に及ぼす要因把握の手がかりを得ることを試みた。しかしその具体的要因の作用過程については、共同研究メンバーであるI園のスタッフの詳細な個々の子どもの育ちの過程の検討を待たなければならない。

注

1) 平成15年7月に成立した「少子化対策基本法」は、第11条（保育サービス等の充実）において、次のように規定している。

（保育サービス等の充実）

第十一条 国及び地方公共団体は、子どもを養育する者の多様な需要に対応した良質な保育サービス等が提供されるよう、病児保育、低年齢児保育、休日保育、夜間保育、延長保育及び一時保育の充実、放課後児童健全育成事業等の拡充その他の保育等に係る体制の整備並びに保育サービスに係る情報の提供の促進に必要な施策を講ずるとともに、保育所、幼稚園その他の保育サービスを提供する施設の活用による子育てに関する情報の提供及び相談の実施その他の子育て支援が図られるよう必要な施策を講ずるものとする。

2 国及び地方公共団体は、保育において幼稚園の果たしている役割に配慮し、その充実を図るとともに、前項の保育等に係る体制の整備に必要な施策を講ずるに当たっては、幼稚園と保育所との連携の強化及びこれらに係る施設の総合化に配慮するものとする。

2) 海野美代子・海野展由・伊井万澄（一番町保育園）・諏訪きぬ（明星大学）・土方弘子（同朋大学）「かかわる力の発達と保育の質に関する研究〔Ⅲ〕〈2〉かかわる力の発達に及ぼす要因の分析と保育のあり方—発達の姿として気になる子の事例的分析から見てきたこと—」（日本保育学会第56回大会論文集所収）

3) 諏訪きぬ，土方弘子「5歳児の発達と‘保育の質’—長期間保育児と短期間保育児の発達上差異をめぐって—」（保育研究所「保育の研究」No.18 2001 pp..56-59）

4) 網野武博他「保育効果に関する縦断的研究（1）」子ども家庭総合研究所2002

謝辞

本論文は同朋大学土方弘子氏および一番町保育園のスタッフとの共同調査，共同討議を踏まえて，諏訪がまとめたものである。共同研究スタッフの変わらぬご厚情と励ましに深い感謝を捧げたい。